

共同研究報告（2003—2004年度）

「日中韓三国における法の近代化過程の比較研究」

研究代表者

吉 井 蒼生夫

1 研究の目的

本研究は、日本・中国（台湾を含む）・韓国における法の近代化過程について、それぞれの国における西欧近代法認識と継受の経緯、ならびにその後の展開過程における三国間の相互影響関係を比較研究し、その特質を明らかにすることを目的とした。

日中韓三国の法の近代化過程においては、西欧近代法の継受が不可欠であったため、日本におけるボワソナードや韓国におけるクレマジなど御雇外国人法律教師が重要な役割を担ったが、同時にまた三国間の相互影響（法律家の交流と立法支援、訪問視察と留学生の受け入れ、翻訳書の出版など）も多大なものがあった。本研究は、従来十分に解明されてこなかったこうした点について実証的かつ総合的に研究することを目指した。

2 研究分担者及び分担内容

川田 昇	民事法の近代化
橘川 俊忠	近代法思想の受容
公文 孝佳	刑事法の近代化
郷田 正萬	近代法受容期における東アジアの政治状況
柴田 直子	地方自治制度の導入（2004年度休職）
東郷 佳朗	近代法受容の法社会学的分析（2004年度）
吉井蒼生夫	万国公法認識と法の近代化

3 調査・講演会

(1) 調査

韓国・中国・台湾における法の近代化過程に関する研究状況の把握、ならびに文献・資料を収集するため、つぎの通り調査を実施するとともに、研究者と学術交流を行った。

また、国内においても資料収集のための調査を実施した。

① 韓国（京畿大学、高麗大学など）

2003年10月12日～14日

吉井・川田・公文・郷田（15日まで）

*韓国の研究者との学術交流を通して、韓国の研究状況の把握に努めるとともに、文献・資料の収集を行った。

② 韓国（ソウル大学、同奎章閣）

2004年2月29日～3月4日

郷田

*ソウル大学の奎章閣所蔵資料の調査を行った。

③ 韓国（ソウル大学、同奎章閣）

2004年3月20日～23日

川田・橘川・郷田・公文

*ソウル大学の奎章閣所蔵の朝鮮朝士視察団に関する資料を調査し、複写するとともに、研究者との学術交流を行った。

④ 中国人民大学法学院

2004年9月6日～9日

吉井・川田・橘川・公文・郷田・東郷・山火

*中国人民大学法学院のスタッフと学術交流を行い、日中双方の研究状況について、研究代表者が報告し、意見交換を行った。
また、文献・資料について調査し、収集した。

⑤ 韓国（ソウル大学、同奎章閣）

2004年9月16日～19日

郷田

*ソウル大学の奎章閣所蔵資料を調査し、複写を行った。

⑥ 宿毛歴史館、自由民権記念館

2005年3月9日～11日

吉井・川田・郷田・公文

*日本の法の近代化に貢献した人物（小野梓・馬場辰猪・中江兆民・植木枝盛・細川潤次郎ら）に関する文献・資料を調査し、収集した。

⑦ 国立台湾大学、国立政治大学、中央研究院

2005年3月26日～29日

吉井・川田・橘川・郷田・東郷・江（早稲田大学専任講師）

*国立台湾大学、国立政治大学、中央研究院のスタッフと学術交流を行い、研究代表者の報告をもとに意見交換を行った。また、文献・資料を調査し、収集した。

⑧ 北海道大学大学院法学研究科

2005年3月26日～29日

公文

*北海道大学の研究グループが実施している東アジア法研究の状況を把握するとともに、同グループが開催したシンポジウムの記録など、文献・資料を収集した。

(2) 講演会

神奈川大学横浜キャンパスに講師を招き、つぎの通り講演会を開催し、学術交流を行った。

① 2003年6月23日

慎重哲（韓国京畿大学校講師・現ソウル家庭裁判所調整委員）

「韓国家庭裁判所の現況と問題点」

② 2004年10月28日

江正殷（早稲田大学国際教養部専任講師）

「台湾近現代法史研究の現状と課題」

4 研究成果

日中韓三国の法の近代化過程に関する第一次資料ならびに研究文献の調査・収集を、各国の研究者の協力を得て行うことができた。現在、収集した資料ならびに研究文献の整理・考証・位置づけを進めており、この間下記の翻訳を行った。

また、西欧近代法の継受に関する理論的研究、ならびに日中韓三国の法の近代化過程に関する各国の研究状況について把握するとともに、研究者間の学術交流を行って、共同研究を進めていくためのネットワークを作ることができた。

① 許東賢（郷田正萬訳）

「一八八一年朝上視察団の明治日本の司法制度の理解」

神奈川法学36巻3号（2004年）

② 許東賢（郷田正萬・吉井蒼生夫共訳）

「一八八一年朝鮮朝上日本視察団に関する一研究

—『聞見事件類』と『随聞録』を中心として—

神奈川法学37巻1号（2005年）

今後引き続き、収集した文献・資料の翻訳、紹介を行うとともに、日中韓三国の研究者とともに学術交流を進め、研究成果のとりまとめを行う。